

# 野間の大坊の白猫

## 鳴海風

この春に引越した。知多半島南西部、伊勢湾に臨む高台の住宅地である(愛知県知多郡美浜町美浜緑苑)。

砂浜の多い海岸を下って、半島南端まで行くと、ウバメガシの社叢で名高い羽豆神社がある。社叢は国の天然記念物になっている。さらに南海上には、篠島、日間賀島等が浮かび、東海の松島と呼ばれている。半島東の海岸部は、いわずと知れた三河湾国定公園の一部だ。緑深い内陸部には、鶴の繁殖地があったりして、南部全体は県立自然公園に指定されている。また、古刹旧跡も多い。

美浜町野間の大御堂寺は、「野間の大坊」の通称で知られる古刹である。白鳳時代の創建と伝えられ、天平年間に行基が重興し、大同年間には弘法大師が留錫して、一千座の大護摩供を修したという。

境内には源義朝の墓がある。平治の乱に破

れた義朝が、わずか十人ばかりの郎党と、美濃の青墓宿から杭瀬川を小舟で下り、長田忠致の館(大御堂寺の東、約四百メートル)にたどりついたのは、平治元年十二月二十八日であった。はじめ忠致は義朝を歓待したが、利に迷い、翌年正月三日、義朝を浴室に襲って殺害した。のちに頼朝は、父義朝を弔うため本堂、本殿など七堂伽藍を建設し、守り本尊の開運延命地藏を納めた。それから八百年目にあたる今年の十月、記念の大開帳が行なわれた。

その野間大坊に、夏のある日、算額を見に行った。

算額は絵馬の一種である。絵馬というのは、もともと馬そのものを神社に奉納していたものが、馬の絵になり、さらにあらゆる思いを、さまざまな形で表現するようになったものである。

た鎧国時代に、和算(わが国独自の数学)が発達し、しかも決して西洋の数学に劣っていなかったことが、こういった絵馬からも明らかになっている。

このての絵馬は、昭和五十九年の調べで、全国に八百以上も現存していることが確認されている。

昨年来この事実に興味を抱いたわたしは、こつこつと文献をあさり、いつか本物を見る機会に恵まれたものだと思っていた。

自宅の近くに算額が残っていることは、実は越してから知った。野間の大坊以外に、南知多町の光明寺、泉蔵院にある。

その日は、台風一過の、抜けるような青空で、気温は、昼前にすでに三十度をこえていた。狭い田舎道を抜けて、寺の駐車場のひとつに車をおいた。三十台以上のスペースに、車はわたしのセリカだけだった。寺の境内は深い敷にさえぎられ先が見えない。わずかに小暗い小道が口をあけているだけである。

そのとき、一匹の白猫が現われた。貧相な二、三歳くらいの雄猫だが、いわくありげな目の運びが、十年飼った挙げ句、ぶいといなくなつたプー助に似ていた。プー助も同じ雄の白猫だった。わたしやわたしの車を恐れる

風もなく近寄ってきて、まるで道案内をかってでたかのように、白猫は、先になって小道に入っていくのである。

蝉の声がかまびすしい道を、白猫の後に歩いて行くと、本堂の横に出た。すぐ右は、源義朝の墓である。

「ああ、お前は義朝の墓守りだったのか」算額は、本堂拝殿右側の鴨居の辺りにあった。ただし、白紙に墨痕鮮やかな複製絵馬である。本物は、今からおよそ二百二十年前の明和八年十一月に、榎本章清が奉納した。

榎本は名古屋の関流和算家、葛谷実順の弟子だった。大地主であり、また酒造業も営んでいたらしいが、非常な勉強家で生涯を和算の研究に捧げたという。南知多町の二つの算額も、彼が奉納したものである。経済的に何ら心配のない彼が、なぜ和算なんかに打ち込んだのだらう。光明寺の算額の裏には、

「……愚答を記しておくものである。しかし、生来愚かで、悪筆の我であるから、文字を誤り、術の誤りもあると思う。以後算道に明らか人がご覧くださるても容赦ください、悪いところは補いお直しくされたい」

と謙虚なことが書かれてあるが、決して安くない算額奉納の費用も考えて、榎本の真

たいの算額は、上半分に円や三角形、四角形などを組み合わせた幾何学図形が描かれ、下半分に漢文がびっしり並んでいる。必ずどこかに奉納年月日が書かれてあるので、それが江戸時代のものであることは分かる。だが、幾何学図形によっては、これは江戸時代に現われたUFOを見た人が、絵馬にして奉納したものだ、と早とちりする現代人がいるかもしれない。

算額には、数学の問題とその答および解き方、そして解いた者の名、年月日などが書かれてある。当時の研究成果の発表方法のひとつであり、特に人のよく集まる有名な神社仏閣が選ばれた。専門家の分析によれば、前述の幾何学図形の中の、円の直径や、三角形の辺の長さなどを、ピタゴラスの定理や円周率を使って、方程式を立ててちゃんと解いているのである。西洋からの文物の流入が途絶え

意は、まったく正反對だったのではないか。

大御堂寺の算額の解法は、天元術(方程式の導き方)や演段術(消去法)を用いた、関流に忠実なものである。中でも、第三問は、十八次方程式を解いて答を求めている。

今回の実地調査をしながら、自然と史蹟に恵まれた南知多に、新鷹会の秋の勉強会として、いつか諸先輩をご案内したいと思った。

同じ道をひろって帰るとき、先ほどの猫は見かけなかったが、セリカの後輪にしっかりと猫がおい付けした跡が見つかった。ひよっとすると、あの白猫は、義朝の墓守りではなく、榎本章清の自己顕示欲を受け継いだ、算額の守り猫かもしれない。